

かく、みる、つなぐ

—こころの軌跡をたどる—



平成29年 12月2日(土)~17日(日) 10時~17時
 ミューザ川崎シンフォニーホール 企画展示室ほか
 (〒212-8557 神奈川県川崎市幸区大宮町1310)

●お問い合わせ アートとトークによる多様性尊重の社会づくり展事務局
 〒105-0011 東京都港区芝公園1-2-16 第一棟ビル2F (株)おわだぐみ内
 Email: arttalk@ohwada-gumi.co.jp

主催: 一般社団法人 全国精神保健福祉連絡協議会 共催: 川崎市 KAWASAKI CITY 公益社団法人 日本精神保健福祉連盟 日本 DIVERSITY 財団 IN THE ARTS beyond 2020

後援: 公益社団法人 日本精神神経科診療所協会 / 公益財団法人 日本精神衛生会 / 一般社団法人 日本いのちの電話連盟 / 公益社団法人 全国精神保健福祉連合会 みんなねつと / 一般社団法人 日本精神科看護協会 / 公益社団法人 日本精神保健福祉士協会 / 一般社団法人 日本作業療法士協会 / 公益財団法人 精神・神経科学振興財団 / きょうされん / 公益財団法人 こころのバリアフリー研究会 / 一般財団法人 日本公衆衛生協会 / 全国精神保健福祉センター長会 / 全国保健所長会 / 全国精神保健福祉相談員会 / 自殺対策円卓会議 / 一般社団法人 全国自死遺族連絡会 / 公益社団法人 日本精神神経学会 / 一般社団法人 日本臨床心理士会 / 公益社団法人 全日本断酒連盟 / 一般社団法人 神奈川県精神科病院協会 / 一般社団法人 神奈川県精神保健福祉協会 / 神奈川県精神保健福祉士協会 / 一般社団法人 神奈川県医療ソーシャルワーカー協会 / NPO法人 じんかれん / 神奈川県精神保健ボランティア連絡協議会 / 公益社団法人 神奈川県養護協会 / 公益社団法人 神奈川県栄養士会 / 公益社団法人 神奈川県介護福祉士会 / 田園調布学園大学 / 特定非営利活動法人 川崎市精神保健福祉家族会連合会 あやめ会 / 塩野製菓株式会社 (2017年10月時点)

12月13日(水) 13~17時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎会議室2

トークセッション「**みえないから、みえる**」 網膜色素変性症で視覚障害になったふたりが、障害を経験すること、そこからの発見について語り合います。

成澤 俊輔 (NPO法人FDA) 生駒 芳久 (特定医療法人和歌浦病院)
 コーディネーター: 大塚 俊弘 (国立精神・神経医療研究センター)
 ※16時~17時は登壇者へのメディアインタビューの時間です。

プロフィール
 成澤 俊輔 1985年佐賀県生まれ。埼玉県立大学社会福祉学科卒。幼少より視覚障害による孤独感を感じ、大学在籍7年間・経営コンサルティング会社での勤務を経験。2009年に独立。2011年12月に就労困難者の雇用創造を掲げるNPO法人FDA事務局長に就任。日本唯一の障がい者雇用分野の当事者・福祉の専門家・経営者という三つの立場を生かし、「世界一明るい視覚障害がい者」というキャッチコピーとともに活動中。
 生駒 芳久 1949年和歌山市生まれ。1968年に徳島大学工学部電気科入学直後、網膜色素変性症と診断される。卒業後、電気会社や市役所で勤務するが視覚障害が徐々に進行。和歌山県立盲学校に2年間に在学後、30歳で和歌山県立医科大学入学、1986年卒業。精神科で研修後、1988年から和歌山県立こころの医療センター勤務。2008年からは医療秘書のサポートを受けて臨床を行う。60歳で全盲となる。
 共催: 日本うつ病センター

12月16日(土) 13時~17時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎第1-3研修室

「**コミュニティのトラウマとアートの役割**」 私たちは、好むと好まざるにかかわらず、さまざまな危機を経験します。それを乗り越えていくうえでアートがどのような役割を果たすかを考えます。

13時~15時30分 講演1「東日本大震災後の子どもの育ち」 福地 成 (公益社団法人宮城県精神保健福祉協会 みやぎ心のケアセンター 企画研究部長)
 講演2「コミュニティのトラウマにアートはどう役立つのか」 逐次通訳 オイゲン・コウ (精神分析的な精神科医)
 コーディネーター: 竹島 正 (全国精神保健福祉連絡協議会/川崎市精神保健福祉センター)
 ※16時~17時は登壇者へのメディアインタビューの時間です。

プロフィール
 福地 成 1975年生まれ。児童精神科医。2001年弘前大学 医学部卒。青森と北海道にて小児科医として勤務。その後、宮城県にて精神科医として精神科救急、地域精神保健に従事。2011年12月より、震災復興に特化した「みやぎ心のケアセンター」に勤務している。宮城県を中心として被災地の訪問、各種の普及啓発活動、地域支援者へのスーパーバイズなどを行っている。
 オイゲン・コウ 豪州メルボルンにあるセントビンセント病院でコンサルタント精神科医を務める一方、パーソナリティ障害を抱える人たちの示す自傷・自殺・暴力といった問題行動についてコミュニティケアの推進に取り組んできた。また、ダックスセンターと CASSE (Creating a Safe Supportive Environment) のセンター長としてアートをとしたメンタルヘルスの啓発などに取り組んだ経験をもつ。

12月17日(日) 13~16時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎企画展示室

ギャラリートーク「**かく、みる、つなぐ-作品の社会的価値と保存を考える**」 作品の社会的価値と保存について話し合います。

安彦 講平、織田 信生、坂井 貞夫、服部 正、オイゲン・コウ、指定発言者: 杉山 春 (ジャーナリスト)
 コーディネーター: 竹島 正 (全国精神保健福祉連絡協議会/川崎市精神保健福祉センター)

プロフィール
 安彦 講平 1968年から精神科病院内で継続されてきた(造形教室)。「治療」や「教育」といった、上から与えられ、課せられ、外から評価、解釈されるものではなく、それぞれが表現活動の主体となって自由に描き、身をもった自己表現の体験を通して、その人その人の内に潜在する可能性を引き出し、もう一人の自分と出会い、自らを「癒し」支えていく「営みの場」を目指し、試行し続けている。
 織田 信生 1948年高知市生まれ。1978年、創作絵本「いまむかし うそかまことか」ですばる書房第6回創作絵本新人賞最優秀賞を受賞。著書に「図説 飛行術入門」「バナナででんわをかけた」「なめくじくん」(すずき出版)などがある。1988年、精神科病院のデイケアで絵画指導をはじめたことがきっかけで、芸術を通して患者と社会を結ぶ精神保健福祉活動を続けている。
 坂井 貞夫 1939年鹿児島県生まれ。中学時代から絵の道を志し、独学。一時家業の薄板工場を手伝い、20歳頃から新聞、雑誌に投稿。カナダ、ブルガリアなどの国際展に5回入選し、1984年にはベルギー国際漫画展で日本人初のグランプリを獲得。1986年から国際漫画シンポジウム展を開催。2011年クロマニンゲン展創設。現在 ニューヨークタイムズシンジケートを通じて風刺漫画を世界に配信。
 服部 正 1967年兵庫県生まれ。兵庫県立美術館、横尾忠則現代美術館学芸員を経て、2013年より甲南大学文学部准教授。専門は美術史、芸術学。アウトサイダー・アートやアール・ブリュットなどと呼ばれる独学自修の芸術家や、障がい者の創作活動などについての研究や展覧会企画を行っている。著書に、「アウトサイダー・アート」(光文社)、「アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国」(監修、国書刊行会)など。

※終了後、そのまま閉会式に移行します。

参加希望者は、希望日と氏名をメールにてお知らせください。 | アートトーク事務局 arttalk@ohwada-gumi.co.jp

トークイベントのご案内

12月2日(土)13時~17時 会場: ミューザ川崎企画展示室 参加申込不要

「オープニングセレモニー・クロマニンゲン宣言」

13時~13時30分 主催・共催団体あいさつ 全国精神保健福祉連絡協議会、川崎市、日本精神保健福祉連盟、日本財団
 13時30分~16時 「クロマニンゲン宣言」 展示作品の作家や関係者が集合し、それぞれの表現について語ります。また、ギャラリートツアーを行います。
 ※ギャラリートツアーの時間中、随時、メディアのインタビューに応じます。どうぞお気軽にお声がけください。

12月3日(日)13時~17時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎第1-3研修室

「ともにそだて、ともにいきる」 発達と障害を中心に置き、精神科医、ジャーナリスト、宗教学者が共生社会に向けて語り合います。

13時~14時 基調講演「そだつことと、そだちのおくれ」 滝川 一廣(学習院大学)
 14時~15時50分 シンポジウム「ともにそだて、ともにいきる」
 滝川 一廣(学習院大学) 佐藤 幹夫(ジャーナリスト) 島菌 進(上智大学グリーンケア研究所)
 コーディネーター: 佐藤幹夫(ジャーナリスト)
 ※16時~17時は登壇者へのメディアインタビューの時間です。

プロフィール
 滝川 一廣 1947年生まれ。名古屋市立大学医学部卒業。同大学精神医学教室(木村敏教授、中井久夫助教授)へ入局。青木病院、愛知教育大学障害児教育講座等を経て大正大学教授。現在、学習院大学教授。主な著書に、『家庭の中の子ども学校の中の子ども』岩波書店、『「こころ」の本質とは何か』筑摩書房、『子どものそだちとその臨床』日本評論社、『子どものための精神医学』医学書院など。
 佐藤 幹夫 1953年生まれ。フリージャーナリスト。批評誌『飢餓陣営』主宰。自立支援センターふるさとの会・相談室顧問。主な著作に『「自閉症」の子どもたちと生きてきたこと』、『ルポ 青年期の発達障害とどう向き合うか』『人はなぜひとを「ケア」するのか-老いを生きる、いのちを支える』『知的障害と裁き-ドキュメント千葉東金事件』など。
 島菌 進 1948年生まれ。宗教学、宗教史、とくに現代の宗教を研究。宗教者災害支援連絡会代表。日本の宗教史、とくに明治以降の宗教史を研究する一方、現代、宗教はどこへ向かうのか、今後の人類にとって宗教はどのような意義をもつのかを考え、科学技術と人のいのちの関わりを問う死生学にも取り組んでいる。著書に、『国家神道と日本人』岩波新書、『倫理良書を読む』(弘文堂)など。
 共催: 塩野義製菓株式会社、シャイアー・ジャパン株式会社

12月9日(土)13時~17時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎第1-3研修室

「つらくなること、なやむことを、ちからにする」 精神疾患を経験することについて、精神科医と当事者が語り合います。

13時~14時 基調講演「こころの病を経験することについて」 古茶 大樹(聖マリアンナ医科大学)
 14時~16時 「私の生きかた、暮らしかた」
 精神疾患を経験した当事者
 コーディネーター: 杉山 春(ジャーナリスト)
 ※16時~17時は登壇者へのメディアインタビューの時間です。

プロフィール
 古茶 大樹 1960年生まれ。1986年慶応義塾大学医学部を卒業後、同大学精神神経科専任講師を経て、2016年1月より聖マリアンナ医科大学神経精神科教授に就任。かつての精神医療の中心概念であった伝統的精神医学の考えを軸に臨床を行う。患者さんの人生を丸ごと理解し援助することで、本質的に回復していけるよう患者さんの意思を尊重した診療を続けている。
 杉山 春 ルポライター。1958年生まれ。雑誌編集者を経てフリーランスライターに。子育てや親子問題、子殺し、自死などをテーマに取材・執筆してきた。著書に『満州女塾』(新潮社)、『ネグレクト 育児放棄-真奈ちゃんなぜ死んだか-』(小学館。第十一回小学館ノンフィクション大賞受賞作)、『ルポ 虐待』(ちくま新書)、『自死は、向き合える』(岩波ブックレット)などがある。

12月10日(日)13時~17時(12時30分開場) 会場: ミューザ川崎第1-3研修室

トークセッション「子どもが逆境を経験することについて」 子どものときに虐待を経験すること、そこから成長することについて、ジャーナリスト、精神科医、地域の支援者が語り合います。

石井 光太(ジャーナリスト) 大塚 俊弘(国立精神・神経医療研究センター)
 コーディネーター: 竹島 正(全国精神保健福祉連絡協議会/川崎市精神保健福祉センター)
 ※16時~17時は登壇者へのメディアインタビューの時間です。
プロフィール
 石井 光太 ルポライター。1977年東京都生まれ。国内外の貧困、災害、歴史、事件などのノンフィクションを幅広く執筆。主な作品に『物乞う仏陀』『絶対貧困』『遺体』『浮浪児1945-』などがある。また、小説や児童書の執筆も多数。
 大塚 俊弘 1962年長崎市生まれ。長崎大学医学部卒。精神科医。1999年長崎県に入職、精神保健福祉センター所長、医療政策課長、保健所長のほか、こども女性障害者支援センター所長として児童相談所長、婦人相談所長を経験。2016年より国立精神・神経医療研究センター上級専門職。

●第一コーナー

有馬忠士作品 有馬忠士-夢宇宙の闇と光をめぐる旅



1940年東京に生まれる。1953年に父の経営する製菓会社が倒産、家族全員が自活生活に入る。高校卒業後、流民生活を送った後、飾り職人として指折りの職人となるが、結核を発病し、結核療養所に入所。この頃、デッサン、油絵の制作に専念。結核療養所を退所、翌年に独立し、飾り職人としての仕事は完成度を高めていくが、婚約者が病死、1971年には幻聴、幻覚が始まり、精神科病院に6回入退院する。この頃、結核療養所入所以来の絵画創作活動が復活。数度の転居の末に、神奈川県横須賀市の山の中に居を定め、1982年に心臓麻痺で死去するまで、500点近い作品を制作した。

●第二コーナー

織田信生作品 王様と私と

土佐病院(医療法人須藤会 高知市)のデイケアで週1回、絵画指導をするようになってもうすぐ30年。患者さんの一人だった岡田さんをモデルに絵を描いたのは最初の10年の終わり頃から次の10年にかけて。1回1時間、500円のモデル料でこれも10年近く続いた。私は王様の絵を描く宮廷画家のような気分で、しゃべるか眠るか、どっちかしかできないモデルを前に、好き勝手に肖像画を描いた。鷹揚な岡田さんはもちろん、私がどんなに風変わりに描こうと、まったく気にしなかった。



●第三コーナー

クロマニンゲン集合



鹿児島県では、クロマニンゲン展実行委員会(代表 坂井貞夫)による「クロマニンゲン展」が2011年から開催されている。

——突然変異の芸術家たち「クロマニンゲン」。約4万年前、人類は突然絵を描きはじめた。クロマニヨンと名付けられた彼らは、明晰な頭脳と豊かな妄想力によって興味深い芸術を生み出した。それは人々の心に大きな影響をもたらし、文明へと発展し劇的な進化を遂げた。現代社会はその人類の英知の集大成である。しかし、人類は今、混沌の時代に突入したようだ。まるで矛盾した設計によってつくられた絶叫マシンに乗せられ、悲鳴と恍惚の叫びを上げているように見える。こうした現代の多次元的な衝撃波によって、芸術家たちに新たな異変が起きているのではないだろうか。ここに突然変異の天才芸術家たちを「クロマニンゲン」と名付け、そのユニークな作品展を開催し未来の始まりを見たいと思う。——



鹿児島の「クロマニンゲン展」にヒントを得て、過去から現在へ、そして未来へとつながる「クロマニンゲン」の系譜と、個々の作家と作品への敬意を表して「クロマニンゲン集合」とした。

“作品にあいに来てください”

かく、みる、つなぐ —こころの軌跡をたどる

人々のこころの健康を守るには、多様性が尊重される社会づくりが重要です。この展覧会では、こころの健康問題を体験したひとたちとそのアートを中心に据え、イベントや交流をとおして、こころの健康、ひとの繋がり、社会のあり方などについて改めて考え合いたいと思います。



FLAT展かわさき アートが人をつなぐ
 11月15日(水)~29日(水)10時~18時
 ミューザ川崎シンフォニーホール企画展示室

川崎市障害者作品展
 12月20日(水)~24日(日)
 アートガーデンかわさき第1展示室

こちらをご覧ください